つながりの中に自分がいる

校長　　髙田　晶子

学校の中庭の葉がきれいに色づきました。常緑樹と紅葉のコントラストが見事です。教室から見る中庭の景色は、日常の慌ただしさから解放されるような気持ちになります。生徒たちから、「リフレッシュできます」という声が聞こえてくるのがよくわかります。

今年も保護者や地域の方々に支えていただき、元郷中学校も年末を迎えようとしています。ありがとうございました。

さて、本校では徳島大学名誉教授の荒木秀夫先生の考案している、コオーディネーショントレーニングを、隙間時間を見つけて取り組んでいます。運動をすることから学習意欲向上へつなげようというねらいです。先生方は、４月１日の初顔合わせから体験し、「モトＣＯＴ（もとこっと)」と言えば「くの字、Ｓの字」「ラディアン」と答えてくれるほど浸透してきました。生徒たちの中でも「ボン、パ、ボン、パ」と口ずさみながら体を動かしている姿を見ます。この運動は、身体のそれぞれの神経を一つの回路としてとらえているので、「つながりのなかの自分」に刺激を与え、人間の持っている潜在能力を発揮させようとしています。この「つながりのなかの自分」について、もう一つの角度から見てみたいと思います。

ＪＴ生命誌研究館　名誉館長の中村桂子氏の講演「生きものである子どもと共に考える」を拝聴し、多くの示唆をいただきました。ご講演の中で、「人間は生きもの」「人間は自然の一部」であるという言葉が強く印象に残っていますので、例を挙げてお話しします。

例：子どもたちが自然とかかわると・・・

（このかかわりとは、コウノトリの巣作りで地域の農作業の手伝いから始まった例です）

子どもたちは、

地域の人に親切にされる　→　自分たちも何かできることはないだろうか考える　→　どのような親切ができるだろうか　→　コウノトリに親切にしよう　→　コウノトリのために田んぼ作りをしよう　→　田んぼを作る　→　米ができた　→　子どもたちが食べた　→　この米を自分たちだけで食べるのはもったいないので給食に使ってほしいと、市長さんにお願いに行く　→　市長さんは、高いからな・・・。と悩んだが、どうにか給食に採用してくれた。　→　もっと活用方法はないかと考えた　→　学区内のコンビニの店長さんのところに行き、米を採用してもらえないか頼みに行く・・・。

という、自然に触れ合うことから始まり、相談をしながら考えた流れを紹介しました。

地域の方は農業を教えることで尊敬され、子どもたちは人とのつながりができ、考える活動に発展していくわけです。また、コウノトリの巣作りからの話ですので、他の生きものとのつながりがあり、生きもののつながりを感じるわけです

このように「つながりのなかの自分」を感じることで生きものである人間のすばらしさを実感するところです。